

宮沢賢治を訪ねて

青木 新門

宮沢賢治ブームである。

賢治、賢治とあまりに騒がしいので、何事が起きたのかと、岩手へ車を走らせた。

こうした軽率な野次馬的行動は、私の生来の癖である。最近特に思いつきで行動することが多くなった。

北上、花巻と、目的もなく車を走らせていたら、あちこちに緑の旗が立っているのに気がついた。最初のうちは、宅地住宅の展示会場の旗だろうと思って見過ごしていたが、やがて「宮沢賢治生誕百年」と染め抜かれた幟旗だと分かった。

市街地から外れた田んぼの畦道にまで立てられている。賢治が常に気にしていた稲の生育も上々の水田をバックに、炎天下の陽炎の中、緑の旗が揺らめいていた。

とにかく今年の岩手の夏は、宮沢賢治一色なのである。

大沢温泉

なぜ、こんなに宮沢賢治が騒がれるのだろうか。賢治が生きている間、誰も彼を認めようとしなかったのに。

特に当地地元では、少年時代は「石っこ賢ちゃん」と指され、やがて「気違い賢さん」と陰口され、宮沢家にも、とんだうつけが生まれたものよ、と陰でささやかれていたのである。

異常なまでに賢治を愛した篤信家の父親と慈母観音のような母親がいなかったら、石川啄木が石もて郷里を追われたように、とっくに追いつ出されていたかもしれないのだ。

実際賢治の38歳の生涯で、父母を頼らず自分の力だけで生活したのは、家出上京した8ヵ月だけである。

確かにむきになって農耕生活を2年間しているが、地元であるため宮沢家の力が陰となり日向となって働いていたことであろう。

また、生前唯一出版された詩集『春と修羅』も、ほんの一部の人（草野心平や高村光太郎など）に高く評価されたが、一般の読者からは全く無視され、童話集『注文の多い料理店』も、全くといっていいほど売れなかったのである。

そんな宮沢賢治が、今日これほどもてはやされるのは、地球環境の変化にも相当する何かが起こったからに違いない。

そんなことを考えながら車を走らせていたら、道を間違えてしまい、花巻温泉へ向かっていたつもりだったのに、大沢温泉へ来ていた。賢治も少年の日に、父政次郎に連れられて度々訪れたという山間の一軒宿である。

引き返すのも面倒と、部屋が空いていないか尋ねると、満室だと言う。どんな部屋でもいいかと粘ってみたら、旧館のクーラーのない部屋なら空いていると言う。

新館は立派だが、旧館はひどく古そうである。とにかく宿がとれて、ほっとした。

廊下に、暁烏敏師や父政次郎や10歳の賢治などの顔が見えるセピア色の集合写真が掛けてあった。額の下に筆字で「明治40年花巻仏教夏期講習会」とある。

部屋に案内されて、窓を開けると、目の前を谷川が流れていた。クーラーなどなぜ必要なのだ。願ってもない部屋に泊まれたものだ、うれしくなった。

川原に突き出た露天風呂から戻ると、しばらく窓際に座って、谷川の流れを見ていた。

突然、何か黒いものが、夕闇を横切った。羽音が鋭かった。よだかだろうと思った。よだかは鷹のように風を切って飛ぶという。私はカバンの中から宮沢賢治全集（ちくま文庫）を取り出し、『よだかの星』を開いた。

よだかの星

〈よだかは、実にみにくい鳥です〉と始まる『よだかの星』のよだかは、顔は味噌をつけたように醜く、くちばしは平たくて耳までさけている。足は、まるでよぼよぼで一間とも歩けない。そんなよだかを他の鳥たちは、差別し軽蔑し、徹底的にいじめた。

鷹などは、自分と名が似ているからと、改名しろ、改名しなければ殺すとまで言うておどす。

よだかは、口を開けて飛ぶと、口の中へ羽虫や甲虫が入ってくる。その度に罪悪感にさいなまれる。

「ああ、つらい、つらい、僕はもう虫を食えないで餓えて死のう。いやその前に、もう鷹が僕を殺すだろう。いやその前に、僕は遠くの空の向ふにいつてしまはう」と決意する。そして太陽やオリオン星や大犬座、大熊座に近づこうと願うが、みんな断られてしまう。



青木 新門 / あおき・しんもん

1937年、富山県生まれ。早稲田大学中退。作家、詩人、冠婚葬祭を扱うオークス株式会社取締役相談役。著書に、『納棺夫日記』（第7回地方出版文化功労賞受賞）、『雪原』（桂書房）、『木漏れ日の風景』（北日本新聞社）など。

よだかは、力を落として羽を閉じて地に落ちて行き、着地寸前のところで、のろしのように空へ舞い上がり、高く高く死力をつくして上昇して行く。寒さや霜が剣のようによだかを刺し、羽根はしびれ、よだかは力尽きる。その瞬間、よだかは自分のからだか燐の火のように青い美しい光となって燃えているのを見る。

そしてカシオピア座の横で、よだかの星はいつまでも燃え続け、今も燃えている。

そんな童話である。私は、今度再び読んでこのよだかは、当時の賢治自身だったのだと思った。

青い美しい光

この作品は大正10年、真宗信者であった父に法華經への改宗を迫り、果たせず、家出上京した頃のもので、生前未発表のものである。

「自分は仏教を知らなかったら、三井、三菱くらいの財産をなしていただろう」と豪語する資産家でもあった父。しかしその資産は東北農民の犠牲の上に築かれたものであった。

賢治は、その宮沢家の後継者と決められた悲しい業を背負っていた。

よだかが弟の川せみに、遠いところへ行くと決意を言うと、
「兄さん、行っちゃいけませんよ」という川せみに
「それはね、どうも仕方がないのだ、もう今日は何も言わないで呉れ、
そしてお前もね、どうしてもとらなければならぬ時のほかは
いたずらにお魚を取ったりしないようにして呉れ、
ね、さようなら」
と、賢治はよだかに言わせている。



宮沢家の家業は、結局いたずらに魚を取る業と賢治には思え、鷹のような父との確執に破れ、家出上京するのである。

そして、その突破口を求め、国会会の門を叩く。しかし、それも門前で丁重に断られ、応対した高知尾智燿氏に

「出家して僧侶となり仏道に専注するが唯一の道ではない。農家は鋤鋤をもって、商人はソロバンをもって、各々その人に最も適した道において法華経を身によみ、世に弘むるというのが、末法における法華経の正しい修行のあり方である。

詩歌文学を得意とするならば、その詩歌文学の上に純粹の信仰がにじみ出るようにしなければならぬ」と言われ、あの有名な『雨ニモ負ケズ』の手帳に〈高知尾氏ノ勸メニヨリ、法華文学ノ創作〉と書き留め、東京在住8カ月の間に、膨大な作品を一気に書き上げるのである。

それはあたかも、よだかが挫折して、着地寸前のところで、のろしのように空へ舞い上がり、高く高く死力をつくして上昇したように、自己を燃焼させるのである。

そしてやがて、燐光のように燃え続け、青い美しい光となって輝く。

この光こそが、いかなる時代にあっても、人を引き付けてやまない永遠の光なのである。

しかし、賢治を神格化したり、わいわい騒ぎすぎると見えなくなる光でもあるのだ。

自然との共生

深夜になっていた。みんな休んだのか部屋部屋の明かりが消え、山の稜線がぼんやりと見えるようになった。星が一つ光って見える。

眠れないまま、童話集を読み続けた。

『狼森と朧森、盗森』を読んでいて、ハッと思った。賢治ブームの秘密がここにもあるように思えた。

賢治はこの童話の中で、未開の森の中へ4人の百姓がやってきて、そこに新しい田畑を開き、住もうとすると



「ここへ畑起こしていいかあ」

「いいぞお」森が一斉にこたえました。

みんな又叫びました。

「ここに家建ててもいいかあ」

「ようし」森は一ぺんにこたえました。

みんなまた声をそろえてたずねました。

「ここで火たいてもいいかあ」

「いいぞお」森は一ぺんにこたえました。

みんなまた叫びました

「すこし木貰っていいかあ」

「ようし」森は一斉にこたえました。

なんというやさしさなのだろう。

自然との共生の姿が、ほのぼのと描かれている。地球環境の破壊が問題とされている今日、心ある人々の共感を呼ぶだろう。

「どうしてもとらなければならない時のほかは、いたずらにお魚を取らないようにして呉れ、ね」というよだかの言葉に、今日の我々はハッとさせられる。

時には、白いご飯のおにぎりが、まぶしい季節もあったが、いつの間にか世界中の食べ物や森の木を買い占めて、快楽や快適を指向している。

人間中心主義に裏打ちされた近代科学を頑なに信じ、自我の確立と欲望の充足こそが幸せに至る道だと信じてきたのである。

しかし、わが国高度成長経済もバブル崩壊と共に低迷し、高齢化社会の到来や地球環境の変化などで、人々の意識にも変化が生じてきているのである。特に生と死を分けて考える二元論では解決できない問題（脳死や安楽死や差別やいじめの問題など）が、人々の心を不安にしている。

そんな不安が、賢治の光を求めるのである。

すすぎが光り、

川原の小石は水晶のように輝き、

川は光の帯となって流れている

樹や電柱や星も燐光のように燃えている

そんな全てが光に包まれた世界を、銀河鉄道

が走ってゆく

賢治が車窓から大声で叫んでいる



「世界ぜんたい幸福にならないうちは
個人の幸福はあり得ない」

＊ ＊

人の声がした。朝食の案内だった。いつの間にか眠っていたのだ。

大沢温泉を後にしながら、富山から、700キロも車でやって来て、イーハトブ童話集を読んだだけだった。けどなんだかとても愉快的気持ちになっていた。

帰路立ち寄った宮沢賢治記念館は、人人人であふれていた。コーヒーでもと、注文の多い料理店『山猫亭』を覗くと満席で、しばらく入口に立っていたが、カツカレーのどんかつをフォークに突き刺して大きな口に入れたお婆さんの眼が山猫のように光ったので、出てきてしまった。

車に乗ろうとした時、入道雲がぐらっと傾いて光った。

きっと賢治が笑ったのだろう。

青木新門著『納棺夫日記』が文庫になりました。これを記念して、Vitalité読者20名に文春文庫版『納棺夫日記』（サイン入り）をさしあげます。ご希望のかたは、添付の葉書でお申し込み下さい。

